

## 五 青谿書院時代(二)

自然に囲まれた青谿書院では、周りの人たちとそれを樂しむことも多かった。しかし、時代は幕末から明治へと激しく動いていき、その波は青谿書院にも伝わってきて、草庵もあわただしい日々を送るようになっていく。

### 秋夜有懷

峯頭秋月冷如氷  
階前老樹風吹蘿  
清夜蟲鳴夢<sub>回</sub>就  
起步<sub>中</sub>庭影婆娑  
悠然懷人々不見  
一般秋意向我多

### 秋夜懷い有り

峰頭<sub>ほうとう</sub>に秋月冷やか氷の如し  
階前の老樹に風蘿<sub>かづら</sub>を吹く  
清夜虫鳴き夢<sub>な</sub>就りがたし  
起きて中庭を歩けば影婆娑<sub>ばさ</sub>たり  
悠然として人を懷えど人見えず  
一般秋意我に向かうこと多し

峯頭<sub>ほうとう</sub>||ホウトウ 峰の頂 懷<sub>おも</sub>||オモイ 階前<sub>かいぜん</sub>||階段の前 庭前 蘿<sub>かづら</sub>||カズラ  
回<sub>かい</sub>||ハズ できない 不可の意味  
婆娑<sub>ばさ</sub>||バサ 衣のそでやすそを翻して行き来するさま。 般<sub>はん</sub>||ハン めぐる  
一般<sub>いちぱん</sub>||一樣 すべて 普通

### 【訳】

#### 秋の夜に思いあり

山の峰の秋の月は冷ややかで氷のようだ  
庭の老木に巻き付いているカズラに風が吹く  
晴れた静かな夜で虫が鳴き眠ることもできない  
起き出して中庭を歩くと影が動いていく  
どこも秋の気配が多く感じられる

### 偶題

回思五十年間事  
一事何曾如<sub>我</sub>意  
只有<sub>枕</sub>頭泉水流<sub>潺</sub>  
潺々自好伴<sub>閑</sub>睡

### 偶題

回思<sub>かいし</sub>す五十年間の事  
一事として何んぞかつて我意の如くならん  
只<sub>ただ</sub>枕<sub>まくら</sub>頭<sub>あたま</sub>に泉水流れる有り  
潺<sub>せんせん</sub>々として自から好む閑睡の伴うを

間事<sub>まじ</sub>||静かでひまなこと 我意<sub>わがこころ</sub>||ガイ 自分の気持ち 枕頭<sub>まくらあたま</sub>||チントウ ま  
くらもと 寢床<sub>ねど</sub>にいるとき 潺潺<sub>せんせん</sub>||センセン 水のさらさらと流れるさま

### 【訳】

## 偶題

今までの五十年間のことに思いをめぐらしてみる  
一つとして自分の意のままになつたことはない  
今はただ枕元に水の流れる音があるだけ  
さらさらとした音は心地よく静かな眠りを誘う

### 送小山生東帰

臥病荏苒過了春  
病に臥し荏苒とし春を過ぎ  
桃花落盡滿園塵  
桃花は落ち尽くし満園の塵  
幽愁不獨因風物  
幽愁は独り風物のみに因らず  
又別二千里外人  
又別れる二千里外の人

荏苒じんぜん じんぜん じわじわと歳月がしだいに過ぎ去っていくさま  
了りょう おわる ついに 幽愁ゆうしゅう ユウシュウ 心の奥にある深い悩み・悲しみ。  
外人がいじん ガイジン よその国(社会)の人

## 【訳】

### 小山生東に帰るを送る

病に臥していて何もしないまま春が過ぎようとしてる  
桃の花はもうみんな落ちて庭にいっぱいになっている  
心の寂しさはこの景色だけで起こっているのではない  
はるか遠くの人と別れてしまうのだ

※小山生は宇都宮藩士小山恒次郎と思われる。門人帳には万延二(一八六一)年、他の宇都宮藩士二名とともに名前が記され入門している。

## 感時事

### 時事に感ず

猿鶴相馴不共驚  
猿鶴相馴れて共に驚かず  
愛聞松響與泉聲  
愛でて聞く松響と泉声  
出山一步無佳處  
山を出れば一步佳処なし  
満目風波鬪巨鯨  
満目風波巨鯨と鬪う

時事じじ ジジ その時その時の出来事

満目まんもく マンモク そちら一面。見わたすかぎり

【訳】

時勢に感ず

ここでは猿と鶴はともに馴れていて驚きあわない  
松の響く音や小川の水の音を愛しんで聞いている  
山を一步出ればこんなすばらしいところはどこにもない  
どこも風や波が荒れており大きな鯨と闘っている

※幕末の情勢を憂い心配している。青谿書院の近くに来る、猿とコウノトリはけん  
かもしないで慣れ親しんでいる。世の中、大波の中でクジラが暴れているよう。

感慨

青年負笈遠尋師  
辛苦零丁獨自知  
究竟前途成底事  
鬢毛霜雪已多時

感慨

青年<sup>きゆう</sup>笈<sup>あし</sup>を負いて遠く師を尋ねる  
辛苦零<sup>れい</sup>丁<sup>てい</sup>獨自<sup>み</sup>知るのみ  
究竟<sup>きゆう</sup>前途<sup>ぜん</sup>に事<sup>こと</sup>か成<sup>な</sup>さん  
鬢<sup>びん</sup>毛<sup>もう</sup>霜<sup>しも</sup>雪<sup>ゆき</sup>已<sup>すで</sup>に多<sup>おほ</sup>き時<sup>とき</sup>

負笈 キュウをオウ 笈(背に負う本箱)を背負う。遠く離れた土地にいつて勉強  
すること。 零丁<sup>れい</sup>レイ<sup>てい</sup> ひっそりとおちぶれて、ひとりぼっちであるさま  
究竟<sup>きゆう</sup>キユウ<sup>きよ</sup>キョウ<sup>きう</sup> きわまる つまるところ 底<sup>そこ</sup>何<sup>なに</sup>  
鬢毛<sup>びん</sup>ビン<sup>もう</sup>モウ<sup>もう</sup> びんの毛 霜雪<sup>しも</sup>霜<sup>しも</sup>雪<sup>ゆき</sup>霜<sup>しも</sup>と雪<sup>ゆき</sup> 心が潔白で厳しいこと

【訳】

感慨

若いとき勉強するために遠くまで師を尋ねていった  
どんなに辛い苦しことを独りでやったかは自分だけが知っている  
しかし結局これから何ができるといえるのだろうか  
髪は白くなってからもう長い時が過ぎた

又

世間無若道人癡  
巧不作官智失時  
唯有水邊林下坐  
風花雪月足遊嬉

又

世間は道人痴の如きはなし  
巧は官<sup>かみ</sup>を作<sup>な</sup>さず智<sup>ち</sup>は時<sup>とき</sup>を失<sup>な</sup>う  
ただ水辺林下に坐す有り  
風花雪月遊嬉するに足る

道人<sup>だう</sup>ドウ<sup>じん</sup>ジン 俗世間をはなれた隠者 癡<sup>ち</sup>痴<sup>ち</sup> 痴<sup>ち</sup> 痴<sup>ち</sup>  
巧<sup>くわう</sup>コウ<sup>こう</sup> 手のこんだわざ うわべをかざる

【訳】

又

世の中は隠者が過ごすようなものではない  
巧みさは官にもならず智あるは時を失う  
ただ水辺の林の下に座り  
風花雪月などの自然を楽しむことで十分だ

雲深處

雲深之處雲深處  
我向此中長閉關  
休把隱憂撓我意  
溪頭洗耳聽潺湲

雲深処

雲深きの処雲深き処  
我この中に向いて長く関を閉ざす  
隱憂をもつて我意をみだすを休め  
溪頭に耳を洗い潺湲を聴く

【訳】

雲深きところ

雲の深い深いところ  
私はこの中において門を閉ざし  
いろんな悩みが心で乱れるの切り替え  
谷の水の流れの音を聞いて心を洗う

※「雲深處」の文字は、友人春日潜庵が安政の大獄で捕らえられ、幽閉中に草庵に送ってきた來た書。潜庵は尊王攘夷のための活動をしていた。草庵はこれを掲げ、潜庵の苦しみを偲んだ。

買刀

偶爾一客叩蓬戸  
起而相迎坐茅堂  
寒喧未了笑開匣  
把示一劍意揚々  
鋒鋌直可貫斗牛  
魑魅魍魎亦斷腸  
水火鍛鍊造者誰  
品題名屬第一場  
山人對之色頓動  
酬值欲辨奈空囊  
畫圖收藏眞糞土  
不妨分付且以償  
爾來愛玩不釋手

刀を買う

偶爾一客あり蓬戸を叩く  
起て相迎え茅堂に坐す  
寒喧了らざるに笑いて匣を開く  
把りて一劍を示す意は揚々として  
鋒鋌直ちに斗牛を貫くべし  
魑魅魍魎も亦断腸す  
水火鍛鍊造者は誰ぞ  
品題名屬第一場  
山人はこれに對して色頓動す  
値を酬い弁を欲すれども空囊なり  
画図の收藏は眞に糞土  
妨ず分付して且く以つて償うを  
爾來愛玩す手に積かず

夜就燈邊睨精光  
吾輩畢竟何殺人  
意氣所寓終是狂  
方今況又非無虞  
鯨鯢風波重海防  
雖然不能伸一策  
敵愾固敢辭勤王  
西山高臥五十春  
窮老至今無用處  
一劍聊表平生志  
永傳兒孫莫相忘

夜燈辺に就き精光を睨む  
吾輩畢竟何んぞ人を殺さん  
意氣の寓る所終に是狂うか  
方に今況は又虞れ無きに非ず  
鯨鯢風波海防は重し  
然れど一策を伸ばす能わざると雖も  
敵愾は固く敢えて勤王を辞す  
西山で高臥五十春  
窮老は今に至り用いる処なし  
一劍聊さか表す平生の志を  
永く児孫に伝えよ相忘こと莫く

偶||グウ たまたま 爾||ジ そのような 蓬戸||ホウコ 蓬で編んだと↓貧し  
い家の門 茅堂||ボウドウ 茅葺きの部屋 喧||ケン かまびすしい  
匣||コウ ハコ 箱 揚々||ヨウヨウ 威勢のよさま  
鋒鋌||ホウボウ 細くとがったきつきさき 斗牛||トギユウ みずち(角のある竜の  
子)に似た空想上の動物  
魑魅魍魎||チミモウリョウ 顔は人間、からだは獣の姿の怪物  
斷||ダン 断ち切る 腸||腸 腸||腸 頓||トン とつさに変化する 囊||ノ  
ウ ふくろ 辨||ベン 分ける 奈|| 糞土||フンド つまらないもの 分  
付||ブンブ 言いつけてやらせる 釋||釈トク オク 虞||おそれ  
鯨鯢||ゲイゲイ 鯨↓弱いものをいじめる悪人 敵愾||テキガイ 敵や競争相手に立  
ち向かつて張りあおうとする意気ごみ  
高臥||コウガ 高尚な心をもって、世俗にわずらわされずに暮らすこと 聊||イサ  
サカ

### 【訳】

#### 刀を買う

ある日 家の門を叩く客があった  
起きていって迎え部屋に通した  
挨拶も終わらないうちに笑いながら箱を開いた  
中から一本の剣をとりだして揚々として見せてくれた  
細く尖った先は斗牛も刺し通すようだ  
魑魅魍魎もまた切り刻むだろう  
これを水や火で練り鍛えて作った人は誰か  
この種類のもので第一級品だ  
私はこれに直ぐに動かされた  
値を支払って欲しいと思うが財布は空だ  
画図を持っていると言っても何の役にもたたない

分割して少しずつ払っていくのでもよいというので支払った  
それ以来大事にして手から離さない  
夜灯りのそばに置いてその輝きを見る  
私はこれで人を殺そうというのではない  
私の気がついに狂ったというのか  
今はまさに恐れがないというわけではない  
外国が来ようとしていて海の守りは重要だ  
それに自分は何の策もできないが  
ただ意気込みだけは勤王についている  
西山から高い志をもって五十年が過ぎた  
老いたものは今は役に立つところはないが  
この一本の剣に普段の私の志を表したいと思ふ  
永く忘れることなくこのことを子孫に伝えよ

乙丑季春初四、

赴福知山途中

福知山に赴く途中

曉霧漸晴風不寒  
輕煙曠日幾峰巒  
兩邊景從兩窓入  
都作春光轎裏看

曉霧漸く晴れ風寒からず  
輕煙曠日幾峰巒  
兩邊の景は兩窓より入り  
都て春光轎裏の看を作す

季春キシュン 陰曆で三月の呼び方  
ウラン 連なつた山々 都ト アア スベテ 轎キョウ キョウ カゴ かゴ  
作ハナス オコル 轎トン まるい朝日 峰巒ホ

【訳】

慶應元（一八六五）年三月四日、福知山に赴く途中に

明け方の霧もようやく晴れて風も寒くなくなってきた  
薄い煙がたち朝日が重なる峰から登ってくる  
両側の景色は両側の窓から入ってくる  
すべて春の光をかごの中にいて味わっている

※この二年前、門人の北垣国道らの加わる生野の変があった。この変の後、福知山藩や豊岡藩は、今後の藩の方針を決めるために草庵を招いて講義を聞いた。

同初五作

同じく五作

郊原列植古青松

郊原列に植える古青松

穩坐暖轎一路通  
穩坐暖轎一路通ず  
春意更非幽隱趣  
春意は更に幽隱にあらざる趣き  
城高十里杳靄中  
城高十里杳靄の中

郊原コウゲン 町はずれの野原 轎キョウ キョウ、カゴ  
幽隱ユウイン 隠れた場所 杳ヨウ ヨウ くらい 靄アイ アイ もや

【訳】

同じく三月五日の作

高原に列をなして植えられている古い松  
暖かなかごの中で穏やかに座って一路目指して進む  
春の気配は隠れ里の雰囲気ではない  
高い城が周り一面深い靄の中にある

※福知山藩で、この漢詩を書いた時には、三月四日から四月五日まで滞在して講義したり、藩内を訪問したりした。

慶應紀元乙丑九月初十日、生野府尹横田君、率然見臨、  
部民緝倉皇不及辭避、乃迎而見焉、因賦一詩記事

泄子閉門段子避 泄子は門を閉ざし段子なら避ける  
迫斯可見豈無人 斯に迫れば見るべき豈に人無しや  
松蹊不礙千旄入 松蹊は礙さまたげず千旄の入るを  
却着清風拂細塵 却つて清風に着き細塵を拂う

乙丑イツチュウ イツチュウ キノトウシ 一八六五年、慶應元年 初ハジメ 陰曆で月の一日から十日までの日付のこと 府尹フイン 府の長官 率然ソツゼン ソツゼン にわかに  
部民ベノタミ ベノタミ、ブミン 王権に服属する官人・人民の総称 倉皇ソウコウ ソウコウ あ  
わてるさま 臨リン おいでになる 泄セツ セツ 段ダン 等級 斯スキ スキ この ※「迫斯可  
以見矣イミヤ 迫ソクラバコニモツテ見ルベシ」〔孟子〕  
礙サマタゲ サマタゲ 旄ボウ ボウ 旗 ものがわからない老人 耄碌

【訳】

慶應元(一八六五)年九月十日、生野代官所の横田氏が突然来られた  
部民の私はあわてて辞退することもできず、お迎えして出会った  
それで一つの詩を作つてこのことを記しておく

望まない人なら門を閉ざし位の高い人なら避けるだろう  
しかしすぐに迫ってきて見分けるようなことはできなかった  
松に囲まれたこの道を妨げるものは何もなく何本ものぼり旗が入ってきた  
それはかえって清風となって私の周りの塵を拂ってくれた

※生野代官所の横田氏が突然青谿書院を訪問した時のこと。生野の変以後、生野代官は交代して、新に横田新之丞がついていた。横田代官は幕府直轄地の巡回中、突然青谿書院に立ち寄ったのだ。その後、横田代官は、草庵を尊敬しその子弟二人を草庵の門人にした。

乙丑九月念四日、

訪堀君席上因賦一詩 堀君を訪ねて一詩を作る

歳自讀書帳裏移 歳読書の帳裏より移り

遊行動輒誤佳期 遊行し動輒佳期を誤る

今朝偶向君園去 今朝偶君が園に向い去く

猶喜秋光一樹枝 猶喜ぶ秋光一樹の枝

念ニネン 廿 歳トシ 年 年ごとに 帳裏ニチョウリ とぼりの内

動輒ニドウチョウ ややもすれば 佳期ニカキ よい時節 約束した日

去ニサル ユク 秋光ニシユコウ 秋の日の光

猶ニナオ

【訳】

慶應元（一八六五）年九月二十四日

堀君を訪ねて一詩を作る

今年は青谿書院（讀書帳裏）より出て

遊行しややもするとめでたい日さえ祝えなかった

今朝はたまたま君の庭園に来て

秋の光が一本の樹の枝に当たると喜ぶことができた

※生野の変後、草庵も落ちつく間もなかった。九月の終わり、かねてから懇意にしていた豊岡藩の重臣堀氏を訪ね、くつろぎ、情勢について話しあった。

感遇 丙寅

對酒黯然懶拳杯 酒に対して黯然として杯を挙げるを懶う

看花惚々興何来 花を見るに惚々として興何ぞ来たらん

逢人試問山陽道  
戎馬西征獨未回

人に逢えば試問す山陽道  
戎馬西征獨り未だ回らず

感遇Ⅱカングウ 自分の境遇について考えること 丙寅Ⅱヘイイン ひのえとら  
慶應二年 黯然Ⅱアンゼン くらいさま 胸がふさがるさま  
懶Ⅱイトウ おこたる めんどろがる 惚Ⅱコツ うっとり ぼんやり  
戎馬Ⅱジュバ 戦争 軍馬

【訳】

思うこと 慶應二(一八六六)年

酒を飲んでも気が晴れず杯を挙げるのもつらい  
花を見てもぼんやりとして何の興味も起こらない  
人に会えば山陽道はどうなっているのかと問うてみる  
長州征伐の戦があるのに独りとして帰ってこない

※幕府による長州征伐が二度にわたって繰り広げられていた。数年前まで門人であった北垣国道、西村哲二郎らが長州藩に入っていることも伝わっていて、心配していたのだろう。

丙寅夏 四月十四日、

發家赴豊岡藩途中

豊岡藩に赴く途中

慣看山色有何奇

慣看山何ぞ奇有らん

雞犬過村又竹陂  
不用輿窓回望去

雞犬村を過ぎれば又竹陂  
用せず輿窓より回望し去るを

漫思一首無題詩

漫思一首無題の詩

雞Ⅱ鶏ケイ にわとり 陂Ⅱハ つか つつみ 輿Ⅱヨ コシ こし  
漫Ⅱミダリニ ソゾロニ

【訳】

慶應二(一八六六)年夏 四月十四日

家をたつて豊岡藩に赴く途中に

見慣れた山で何にも珍しいところはない  
鶏や犬のいる村を過ぎれば竹藪がある  
輿の窓より見える景色は後ろに去って行く  
そぞろに思うこと 無題の詩として一つ

丁卯冬初、

丁卯冬初、

從福知山歸途中作

福知山より歸途中の作

横山城裏三旬客

横山城裏三旬客となり

又向但州尋路歸

また但州に向かう路を尋ねて歸る

猶喜山村秋未老

猶喜ばし山村の秋未だ老いず

黄花處々野人籬

黄花処々野人の籬

丁卯テイボウ ひととう 慶応三年 從ヨリ 横山城ヨリ 福知山城の別名 城

裏シヨウ 城壁にとり囲まれた市街の中 旬シユン 十日間

野人ヤジン 田舎の人 誠実な人 籬リ マガキ まがき かき

【訳】

慶応三(一八六七)年冬の初め 福知山から帰るとき

福知山城に三十日ほど客となっていた

また今、但馬に帰ろうとしている

嬉しいことに周りの山村の秋色はまだ残っている

黄色い花が村人の籬の中に見える

己巳早春

己巳早春

午飲催眠直至晡

午飲眠りを催し直ちに至る晡ひぐれ

醒来窓底坐團蒲

醒め来たり窓底の團蒲だんぷに座す

遠郊柳樹近郊雨

遠郊は柳樹近郊は雨

便覚新春入畫圖

便すなわち覚ゆ新春画図に入るを

己巳ツチノトミ 明治二年 晡ホ ひぐれ 窓底ソウテイ

團蒲ダンフ 郊コウ 周辺の地域 団

【訳】

明治二(一八六九)年早春

昼飲み眠気がきてすぐに夕方

目覚めて窓のそばで座布団に座る

遠くには柳の樹近くは雨

まるで早春の絵の中に入ったようだ

感懐

感慨

満頭白髪且無嗟

満頭は白髪 且まさに嗟なげくなし

一片丹心怕挫磨

一片の丹心の挫磨さを怕おそれる

請看礮溪垂釣叟

請看 礮溪に垂釣す叟おきな

